

室韋黑沙、南闕幽州、節度使張仲武破之、悉得其衆、那頡曷走、烏介執而殺之

と記せり、兩書の記事を比較すれば赤心の殺さるゝに至りし事情に就きては、互に相合せざるものあり、此の點に關しては〔二九四〕通鑑は伐叛記・一品集等の記事を斟酌して、舊書の記事の實を得たるものに非るべきを述べ、新唐書に従ふべきを論證したる所に譲り、只だ舊唐書も其の本紀に於ては、既に引けるが如く「大首領唃廝囉與赤心宰相相攻、殺赤心」と記し、新唐書回鶻傳の記する所と異なるなきを注意するに止むべし。

偕て上に記したる事實が何時起りしかに就きては諸書一も之を記する無けれども、新唐書が會昌二年正月の條に記せる回鶻の横水塞を侵せること〔二九五〕につきて、李德裕の上言せる所〔二九六〕を見るに「未知此兵爲那頡所部、爲可汗遣來」と曰へり、會昌二年正月に於て那頡の所部と可汗の所部とを區別するに由りて考ふれば、當時那頡は、既に其の所部を率ゐて、烏介可汗と別の行動に出でたるものなること疑無く、從て唃廝囉が赤心を殺し、赤心の部下の七千帳が那頡の收むる所となりたるは、此の時以前の事にして、思ふに會昌元年末の事件に外ならざるべし、此の後那頡は室韋の黑沙榆林に據り、幽州を窺ひしものと見る可きなるが、舊唐書張忠武の傳に據れば

廻紇有特勒那頡曷、擁赤心宰相一族七千帳、東逼漁陽

と記し、新唐書同傳の記する所亦同じ、されば那頡曷は會昌元年今の陰山山脈と黄河との間の烏拉特部の地に當る天德軍より東方に走り、東に振武大同を瞰むる室韋の黑沙榆林に據り、更に幽州を闕ふに至りしなり、室韋の黑沙榆林といふは新書には只黑沙とのみ記さるゝものなるが、讀史方輿紀要卷四盛樂城の項に、振武軍の「北七十里有黑沙磧」と記し、又其の黑沙磧の項に「在振武故城北、亦謂之鳴沙」と曰へるものに當り、其の地に榆林の存した